

マレーシアのダアワ運動と高等教育機関の イスラーム化に対するインドネシアのインパクト インドネシア人活動家イマドゥディン・アブドゥルラヒムを事例に

野中 葉

1. はじめに

1.1. 問題の所在

本稿は、1970年代に顕在化したマレーシアのダアワ運動¹⁾と、高等教育機関のイスラーム化に対して与えたインドネシアのインパクトを、インドネシア人のダアワ活動家であるイマドゥディン・アブドゥルラヒム(Imaduddin Abdulrahim: 以下、イマドゥディン)の活動を事例に論じるものである。アラビア語起源で「呼びかけ」を意味するdakwahまたはda'wahは、インドネシアやマレーシアの文脈においては「イスラームへの呼びかけ」を指す。日本語では「宣教」と訳されることもある。マレーシアでは1960年代末から1970年代初頭にかけて始まるマレー人優遇を基本的性格とする「新経済政策(NEP)」[鳥居 2004: 185]によって、またインドネシアでは1960年代後半に始まるスハルト体制下で、政府主導の開発政策が進展する中、同胞のイスラーム教徒へイスラームを呼びかけることによって、社会をより良く変えていこうとする人々の運動が、本稿で論じるダアワ運動である。両者は、世俗的な高等教育を受けた人々が担い手となったこと、1960年代末から1970年代にかけ本格化した両国の開発の時代に、世俗的で権威主義的な政府を批判し、イスラームを軸にした社会改革を目指したことなど、いくつかの共通点が見出せる。しかしながら、両運動の影響や関連性については、Zainah Anwarが1987年の著作の中で、マレーシアのダアワ活動家に対して実施した調査に基づき言及しているものの、それ以降の先行研究では詳しく論じられて来なかった。

また、同時期マレーシアでは、マレー人優遇政策に基づき、それまで非マレー、非ムスリムの学生が多数を占めていた高等教育機関が、マレー人に門戸を開

き、大きな変革の時期を迎えていた。マレーシアの高等教育機関のイスラーム化は、国際マレーシア大学が設立され(1983年)、ABIM(Angkatan Belia Islam Malaysia: マレーシア・イスラーム青年同盟)の元代表だったアンワル・イブラヒム(Anwar Ibrahim)が政権に参加して教育大臣を務めた(1986年~1991年)1980年代を中心に言及されることが多い[杉本 2005: 223-224など]。しかし、高等教育機関のイスラーム化の萌芽は、マレー人優遇政策が打ち出され、イマドゥディンらを通じてインドネシアのダアワ運動との接点を持った1970年代初頭に見ることができる、というのが本稿の見解である。

一方、インドネシアの大学ダアワ運動の初期の拠点となったのは、バンドゥン工科大学のサルマン・モスクの運動であり、同運動は、1950年代末に、学生たちによる学内のモスク建設運動としてスタートした。1972年にサルマン・モスクが完成する以前から、学生や同大学を卒業した若い大学講師たちによって、ダアワの活動が活発に行われていた。当時のサルマン運動のリーダーの一人であるイマドゥディン・アブドゥルラヒムが、マレーシアと直接関わりを持った人物であり、本稿の主人公である。

1.2. 先行研究と本稿の位置づけ

この時期のダアワ運動の盛り上がりは、マレーシアでは、特にNEPの実施とそれに伴う近代教育への就学機会の拡大による、マレー人社会の急速な社会変動とのかかわりで[鳥居 2004、多和田 2005、久志本 2015など]、またインドネシアでは、スハルト体制に異を唱える大学生たちの運動として、それぞれの国内要因に言及しながら別々に論じられてきた。

一方で、Zainahは、創設当初のABIMに対するインドネシアのイスラーム改革主義者の影響を指摘している。ABIMは、マレーシアの都市部の大学生組織を母体とし、高等教育を受けた青年層をメンバーとする団体であり、この時期のダアワ運動体の中で最大勢力

1) マレーシアのダアワ運動は、「ダッワ運動」[多和田 2005ほか]や「ダクワ運動」[鳥居 2004ほか]と表記される場合もあるが、本稿では、インドネシア側の表記に揃え、「ダアワ運動」と表記する。

を誇った。Zainahによれば、ABIMと、その母体となったPKPIM (Persatuan Kebangsaan Pelajar-Pelajar Islam Malaysia: マレーシア・イスラーム学生全国連合)は、インドネシアのHMI (Himpunan Mahasiswa Islam: イスラーム学生連盟)とのつながりを持ち、HMIがジャカルタやバンドゥンで実施するダアワのトレーニングに参加することで、ABIMのリーダーたちが、人生の指針としてのイスラームの呼びかけ方、組織運営やイスラーム運動の手法についても学んだことが論じられている。また、インドネシアの活動家であるバンドゥン工科大学講師のイマドゥディン・アブドゥラヒムが、1970年代初頭に一時期クアラランプールに滞在していたこと、マレーシア工科大学 (UTM) で教えながら、マレー人学生たちに対してイスラームの説教を定期的に行っていたことも指摘されている。しかしながら、イマドゥディンのイスラームに対するアプローチは妥協を許さず、好戦的だったため、ABIMの学生たちが離反するようになり、両者の関係は長くは続かなかったと述べられている [Zainah 1987: 18-21]。

マレーシアのダアワ運動とインドネシアのダアワ運動の接点に着目する筆者の視点は、Zainahの指摘を踏襲するものである。筆者は、2017年、インドネシアのサルマン・モスク運動の資料を用いて、彼のマレーシアでの活動や、ABIMの活動家だったアンワル・イブラヒム (Anwar Ibrahim) との交流を中心に、イマドゥディンのマレーシアでの活動を論じた [野中 2017]。本稿では、サルマン運動の活動家たちが書いたイマドゥディンの伝記 [Jimly 2002] や彼の回顧録 [Imaduddin 2007] に加え、1970年代初頭、イマドゥディンが一時的に派遣された国民工科大学 (ITK: Institut Teknologi Kebansaan: UTMの前身) の校長アイヌディンの伝記 [Yaacob 2011] を用いて、マレーシアのダアワ運動や高等教育のイスラーム化におけるインドネシアのインパクトを考察する。

2. インドネシアの大学ダアワ運動とイマドゥディン

2.1. インドネシアの大学ダアワ運動

インドネシアでは、1965年の9月30日事件を鎮圧し、事態を掌握して、1968年に正式に第2代大統領に就任したスハルトが、開発と安定を旗印に、中央集権的な体制を敷いた。開発独裁とも呼ばれる体制である。マクロ経済の成長を最重要の課題に据え、基幹産業に投資を集め、重点的に発展を促すと共に、こうした開

発を支える人材育成のため、初等教育から高等教育に至るまで教育機関の整備、教師の増加を図り、人々の教育水準が向上した。一方で、開発政策を効率的に進めるための治安維持にも力を注ぎ、政権に反旗を翻す可能性のある活動や勢力は、徹底的な弾圧の対象になった。経済成長と教育水準の向上が達成される一方で、政権や軍隊による締め付けが厳しい時代でもあった。

大学ダアワ運動は、スハルト体制下の1970年代頃から顕在化した大学生たちによるイスラーム運動である。イスラームを学びながら、イスラーム的価値を他の人々に広め、イスラームの教えに基づく様々な行動を一人一人が実践することによって社会改革をも目指そうとする運動であった。拠点となったのは、イスラーム系の大学ではなく、バンドゥン工科大学やインドネシア大学など、一般の教科を教える国内屈指の国立大学だった。大学ダアワ運動に参加する学生たちの中で、イスラーム式のヴェールを着用する女子学生が増加したり、大学内のモスクを拠点にイスラームの勉強会や活動が活発化するなど、スハルト体制下での大学のイスラーム化の担い手にもなった。

また、大学ダアワ運動は、1990年代末以降、変革期のインドネシア社会に与えたインパクトも非常に大きかった。アジア通貨危機に端を発する経済危機を背景に、スハルトに対する社会の不満が一気に表面化した1998年、大学ダアワ運動に参加する学生たちは、政治団体 KAMMI を創設し、30年以上に渡り大統領の座にあったスハルトを退陣に追い込む大きな原動力となった。また、スハルト体制崩壊後は、大学ダアワ運動を創設母体、支持母体とする新政党の福祉正義党²⁾ が支持を拡大、民主化後の議会政治において一大勢力となった。

先行研究では、大学ダアワ運動が、スハルト体制下の世俗の大学における聖典主義的、あるいは急進的なイスラーム運動と位置付けて論じられたり [Liddle 1996, Hefner 2000, Bruinessen 2002]、また、福祉正義党の創設・支持母体として論じられている [見市 2004, Damanik 2002, Furkon 2004]。特に後者では、世俗国家を否定し、シャリーアに基づくイスラーム国家樹立を目指すイスラーム主義運動と位置づけられ、中東のエジプト発祥のムスリム同胞団との関係が強調されている。

筆者は、主に2007年から2008年にかけて実施した調査に基づいて、大学ダアワ運動には異なる時代に異なる二つの潮流があることを明らかにした。一つは、

2) 1998年の創設から2002年までの政党名は、正義党。

時代的に新しく、1980年代半ば、ジャカルタから全国に波及したタルビヤと呼ばれる潮流である。小グループでの学び合いによるイスラーム学習を基本とし、中東に留学し、彼の地でムスリム同胞団の思想やメンバー育成の手法に強い影響を受けた人々によって、ジャカルタの学生たちに伝えられ、短期間のうちに全国に広まった。スハルト政権崩壊後に福祉正義党を創設し、主要な支持母体になったのも、このタルビヤで学んだ人々である[野中 2010]。

もう一つは、タルビヤが伝わるより以前の1970年代から80年代にかけ、全国的な影響力を誇ったバンドゥン工科大学のサルマン・モスクを拠点とする運動である。同運動は、オランダ植民地時代の名残が依然として強く残る1950年代後半のバンドゥン工科大学で、学内に礼拝する場所を求める学生たちによってモスク建設運動としてスタートした。オランダ植民地政府によって1920年に創設された国内最高峰の理系の大学であり、初代大統領スカルノを輩出したことでも有名な同大学にも、この時期になると、インドネシアの独立後に教育を受けて育った青年たちが入学してくるようになっていた。モスク建設運動に関わった学生たちの多くは、1950年代に大きな政治勢力であったイスラーム改革派のマシュミ党に傾倒しており、中には、マシュミ党幹部の子弟たちも含まれていた[野中 2011:103-104]。1960年代、初代スカルノ大統領から第2代スハルト大統領への政権移行に伴う社会的混乱の時期にあって、モスク建設の計画は遅々として進まず、モスク完成に漕ぎつけたのはスハルト体制への移行後数年が経った1972年だった。バンドゥン工科大学では、モスク建設に向けた働きかけと並行し、モスク完成以前から、学生や同大学を卒業した若い大学講師たちによって、ダアワの活動が活発に行われていた。こうした活動が、モスク完成後にはさらに発展し、ダアワの活動を志す全国の大学の学生を集めたトレーニングや、中高生、小学生を対象とするイスラーム学習やイスラーム活動の伝授など、様々な活動が展開していった[野中 2008]。ムスリム同胞団の影響を強く受けたタルビヤの潮流とは異なり、サルマン運動の活動家たちは思想的に多様であり、イスラーム世界の様々な思想を学び、それぞれに受容した[野中 2012]。本稿の主題であるマレーシアとのつながりを持ったのは、1960年代から70年代にかけ、このサルマン運動の指導的立場にあったイマドゥディン・アブドゥルラヒムである。

2.2. イマドゥディン・アブドゥルラヒム

イマドゥディンは、1931年北スマトラのランカ生まれ。父は、イスラーム学的世界的権威であるエジプトのアズハル大学に留学した経験を持つウラマーだった。幼少期は、オランダ語原住民小学校(HIS)に通い、インドネシア独立後に中学高校で学び、1953年にバンドゥン工科大学に入学し、電気工学を専攻した。入学直後からHMI³⁾に参加し、HMIのメンバーを対象に、外部のウラマーを招いたイスラーム説教会などを企画するなど、一貫してダアワの活動に従事し、1966年には、HMI傘下のイスラーム学生ダアワ部門(LDMI: Lembaga Dakwah Mahasiswa Islam)の部門長に就任した。1967年、このLDMIが主催し、イマドゥディンが講師を務めた中部ジャワ・ブカロンガンでのダアワのトレーニングに、マレーシアからアンワル・イブラヒムら8人のPKPIMのマレー人が参加し、イマドゥディンから直接交流を持ったことは、[野中 2017]で詳しく論じた通りである。

一方、バンドゥン工科大学では、1950年代末から、学内にモスクが欲しいと願う学生及び若い講師たちが結集し、大学や当局に対するモスク建設運動を展開するとともに、学内で金曜集団礼拝を呼び掛けたり、その他さまざまなイスラーム活動を実施し始めていた。イマドゥディンも、この活動に学生の時から参加し、リーダー的存在となっていった。1963年には、バンドゥン工科大学モスク育成者財団(Yayasan Pembina Masjid ITB)として組織化され、モスクの建物創設とダアワの諸活動が実践されていった。イマドゥディンは、1962年にバンドゥン工科大学卒業後、1963年から約3年間、修士号取得のためアメリカのアイオワ大学に留学し、帰国後の1968年からはバンドゥン大学に講師として着任し、電気工学と、科目として設置されてまもない宗教(イスラーム)⁴⁾の授

3) オランダ支配からインドネシア独立を達成する目的で1947年に設立されたムスリム学生団体。スハルト体制初期には、当時、代表を務めたヌルホリス・マジドの「Islam Yes, Partai Islam (イスラーム政党)No!」のスローガンに象徴されるように、体制協調の傾向が強まっていた。イマドゥディンは、HMIのこうした流れに決別し、サルマンでのダアワ活動に全精力を傾けるようになっていった[野中 2008:152]。

4) スハルト体制下では、その初期の1960年代後半から、人々が共産主義に陥らないための戦略として宗教教育を重視し、大学でも宗教が教科として教えられ始めていた。が、授業を担当することのできる教員は圧倒的に不足していた。元マシュミ党党首のナッシールや党の元幹部らは、バンドゥン工科大学やインドネシア大学の若い講師たちを集め、各大学で彼らが宗教の授業を教えられるよう、短期の集中トレーニングを実施した。イマドゥディンも、ナッシールに誘われ、同トレーニングに参加し、その後、バンドゥン工科大学で宗教の授業も担当するようになった。詳しくは、[野中 2011:106-107]。

業を教えながら、サルマンの活動に精力的に参加した [Imaduddin 2007: 294]。

バンドゥン工科大学キャンパスの南側に接する土地に、モスクの建物全体が完成し、そこで初めての金曜礼拝が行われたのは、1972年である。後述するように、イマドゥディンはちょうどマレーシアに派遣されていた時だった。

3. マレーシアのダアワ運動と高等教育

3.1. マレーシアのダアワ運動

イスラーム教徒が人口の9割弱を占めるインドネシアと異なり、マレーシアでは、イスラーム教徒であるマレー系は人口の約6割を占めるにすぎず、非ムスリムの華人やインド系住民と並存している。イギリス植民地時代から、農業に従事し相対的に貧しいマレー系と、都市部で商工業部門を独占し、経済的に優位な非マレー系という民族間の分断は続いてきた [多和田 2005: 84-86]。1969年5月13日の民族衝突は、民衆レベルでマレー系、非マレー系双方に、かなりの不満が蓄積されていたことを露呈し、この事件を契機に、「マレー系優遇」へとマレーシア政府が舵を切ることとなった [同: 87]。マレー系優遇の理念を具現化したものとして「新経済政策 (NEP)」を挙げることができる。NEPは、マレー人を中心としたブミプトラの社会的・経済的地位向上を目的として、1971年から20年間にわたり実施された。種族の別を問わないマレーシア全体における貧困の撲滅と、マレー社会の再編、すなわち具体的な数値目標を掲げてマレー人の経済的地位の向上を目指す、という二大目標を掲げていた。これにより、NEPが実施された20年間の間に、マレーシアのGDPは増加し、貧困が解消、中等・高等教育の就学機会が拡大し、また、都市部における近代的産業や専門職種への就業機会も拡大した [鳥居 2004: 187-189]。

こうした政治社会状況の急激な変化を背景に、1970年前後から都市の青年層を中心とする新しいイスラーム諸勢力が台頭した。これらは、ダアワ運動と呼ばれた。Zainahによれば、マレーシアの文脈におけるダアワとは、ムスリムをよりよいムスリムに変えていくと活動であり [Zainah 1987: 15]、久志本によれば、イスラームを個人の生き方と社会生活の全体においてより重視する、イスラーム復興を求める運動の総体である [久志本 2014: 157]。

ダアワ運動には、主として以下の3つの全国的なイ

スラーム運動体が含まれる。一つは、都市部の大学生が主導したABIMであり、もう一つは、独自のコミュニティ活動を基盤とするダールル・アルカム (Darul Arqam) であり、最後に、インド系ムスリムを中心とするジェマア・タブリーグ (Jemaah Tabligh) である [Nagata 1984: 83, 鳥居 2003: 26]。インドネシアのイマドゥディンと直接の関係を持ったのが、これらダアワ運動の中で最大の勢力をもち、マレーシアの政治にも大きな影響を与えることになった [多和田 2005: 105] ABIMである。ABIMは、1961年に設立されたPKPIMを母体として、1971年に創設された⁵⁾。大学を卒業した若いムスリムたちを構成員とし、トレーニングの実施や学校設立、出版活動などを通じてイスラームの原則に基づく社会構築を目指した [Zainah 1987: 17]。1972年には約9,000人だったメンバーは、1980年には35,000人にまで増加した [Nagata 1984: 88]。ABIMが急速に拡大を遂げる1974年から1982年まで代表を務めたのが、アンワル・イブラヒムである。 [野中 2017] で論じた通り、イマドゥディンはABIMやアンワルと直接つながり、交流を持っていた。

3.2. マレーシアの1970年代初頭の高等教育

マレーシアの高等教育の特徴は、私立セクターの機能を最小限に制限する国立主導型で、全体の規模もきわめて小さく抑えられてきた。1970年より以前、私立大学は存在せず、国立大学も、クアラルンプールのマラヤ大学 (1959年創設)⁶⁾ とペナンのマレーシア理科大学 (1969年創設) の2校のみであり、極端に絞られたエリート型高等教育政策がとられてきたと言える [杉本 2005: 191-192]。しかしながら、1969年の民族衝突以降のNEPとマレー系優遇政策においては、これまで中国系、インド系に比べ、圧倒的に少なかった高等教育を受けるマレー学生の数を増やし、マレー人の教育水準を高め、将来のマレーシアの担う人材を育成することが求められた。また同時に、1970年代以降、高等教育における英語への依存を極力抑え、マレー語の使用が勧められていった。1970年には、マレーシアで3つ目の国立大学としてマレーシア国民大学が創設された。同大学が特徴的だったのは、設立当初から、全学部でマレー語を教授言語として採用したことである。こ

5) マレーシア政府に正式に登録されたのは、1972年である。

6) マラヤ大学は1949年にシンガポールに設立されたが、1959年にクアラルンプールにキャンパスが開設された。シンガポールのマラヤ大学は1962年にシンガポール大学となり、以後マラヤ大学の本部はクアラルンプールとなった [久志本 2015: 164, 448]。

うした政策に伴い、マレー人学生の数も年々増加していった。マラヤ大学では、マレー人学生数は、1960年代には華人の約半数にすぎなかったが、1970年から71年にかけてマレー人と華人はほぼ同数になった。また、全学部でマレー語を使用言語として設立されたマレーシア国民大学では、1975年までに入学した2502人のうち、2,337人をブミプトラが占めていた[久志本 2015: 164-165]。

3. 3. 国民工科大学 (ITK) の状況

インドネシアのバンドゥン工科大学からイマドゥディンが派遣されたITKについても、同校の学長を務めたアイヌディンの伝記を参照し、当時の様子を概観したい。

ITKの前身は、イギリス植民地時代に創設されたクアラランプール技術カレッジ(MTKL: Maktab Teknik Kuala Lumpur)である⁷⁾。MTKLの校長にはイギリス人、また、マラヤ連邦独立後は非マレー系が就任してきたが[Yaacob 2011: 117]、1969年5月13日に民族衝突が発生し、その後のマレー人優遇政策が打ち出されていく中、副首相だったアブドゥル・ラザクの命により新校長に就任したのが、マレー人エンジニアだったアイヌディンである。MTKLには、1969年当時、872人の学生が在籍していたが、マレー人学生はそのうちのわずか10%、つまり100人にも満たない人数だった。アイヌディンは、マレー系学生の人数を増やすことを期待されていた[Yaacob 2011: 125]。

同時期、MTKLは、マレー系優遇政策の中で、国家の開発を担うマレー人テクノクラートを輩出する技術系大学となるべき、という考えが大勢を占めていた。しかしながら、当時、マレー人学生のみならず、教員の数も圧倒的に不足していた。だから、まずは大学と同レベルの単科大学(Institut)を作ることとし、アイヌディンによって提案書が教育省に提出された。この提出書には、合わせて、「マレー語を使用言語とする」ことが明記された。科学やテクノロジーを教えたり、議論したりするのに、マレー語が本当に使えるのか、という議論はあったものの、アイヌディンの提案は実現し、1972年3月、大学と同レベルの単科大学という形で、ITKが創設された。新設のITKには、工学部、建築学部、理学部という3つの学部が設置された。

7) イギリスが最初に創設したのは1904年のSekolah Teknik Treacherである。その後、同学校は1946年にカレッジレベルに昇格し、名称を変更してMTKLとなった[Yaacob 2011: 59]。

1971年には学生数1,211人までに増加したが、ITKになった1972年にも、教員数は60人あまりで、学生に対し、教員は依然として不足していた。この不足分を補うため、インドネシア・マレーシア政府間協力計画(Rancangan Kerjasama Kerajaan Indonesia-Malaysia)に基づいて、インドネシア人の大学教員たちが一時的にITKに派遣された。アイヌディンの伝記によれば、その数は21人、全員がバンドゥン工科大学からの派遣だった。アイヌディンの証言によれば、受け入れの条件は、マレー語を話せるイスラーム教徒だということ。イスラーム的価値を理解し、体得しており、各分野で優秀な教員が多いということで、バンドゥン工科大学に講師派遣が依頼されたのだった。この21人の中には、本稿の主人公、サルマン運動リーダーのイマドゥディンも含まれていた。

また、ITKはマレーシアで初めて、マレー人学生に対しイスラームの授業を提供した大学である。ITK設立の1972年より、マレー人学生にはイスラームが、またムスリム以外の学生には道徳が、週2時間の授業を通じて教えられた。アイヌディンの伝記によれば、当時、官僚や政治家、大学関係者などマレー人エリートたちの多くは、イスラームを単なる儀礼の宗教としてしか見ておらず、イスラームが現代生活や進歩に対し貢献できるとは考えていなかったし、教育と宗教を結びつけることに反対だった。アイヌディンや当時ABIMで活動していたアンワル・イブラヒムらの発案で、イスラーム教育が始まった。アイヌディンの証言によれば、当時、学生たちのモラルは崩壊し、だらしない身なりで規律なく、昼夜騒がしいばかりで、大学の礼拝所で礼拝する者はおらずに、常に空の状態だった[Yaacob 2011: 164]。イスラーム教育は、マレー人個人を作る基礎であり、イスラームを心に持つことで、モラルある行動を取ることができると考えられたのである。

ITKはその後、1975年にマレーシア工科大学(UTM)として刷新され、建築部、土木工学部、機械工学部、電気工学部、理学部という5つの学部を持つ大学として再スタートを切った。1976年には、全学生2,593人を抱える大学となった[Yaacob 2011: 190-191]。ITKの校長を務めていたアイヌディンは、UTMの副学長に就任し、引き続き、大学運営に携わり、大学のイスラーム化を推進していった。

4. イマドゥディンのマレーシアでの活動

4.1. イマドゥディンのマレーシアへの派遣

先に述べたように、イマドゥディンは、インドネシアとマレーシア両国政府の協力計画に基づいて、マレーシアの大学の教員不足を補うため、ITKに派遣されたITBの21人の教員の一人だった。

イマドゥディンの伝記には、マレーシア派遣が決まった際のエピソードが書かれている。それによれば、マレーシアの高等教育長官(Dirjen Perguruan Tinggi Malaysia)のハンダン(Hamdan)⁸⁾がバンドゥン工科大学を訪れ、サルマン・モスクで金曜礼拝に参加したことがあったという。その時、たまたま、礼拝の説教師(khatib)を務めたのがイマドゥディンであり、説教のテーマは「イスラームと科学とテクノロジー」だった。ハンダン長官は、そこでイマドゥディンに声をかけ、マレーシアのマレー人たちは、たとえ若い人であっても、西欧に関する事柄はイスラームに反するという意識があり、西欧で発展したテクノロジーを学びたがらないこと、それゆえに、今に至るまでテクニカル・カレッジの学生はほとんどが中華系かインド系で占められ、マレー人学生はほとんどいないことを伝えた。イマドゥディンは長官の話に危機感を持ち、礼拝に同席していたバンドゥン工科大学のドディ・ティスナアミジャヤ(Dodi Tisnaamidjaya)学長の許可を得て、マレーシアへの派遣されることが決まった[Jimly 2002: 35; Imaduddin 2007: 322]。

4.2. 大学での宗教の科目化への貢献

イマドゥディンらが派遣された1972年は、MTKLからITKに替わった年であり、彼らは専門の授業を教えながら、大学のカリキュラム編成も含め、様々な仕事に従事した。イマドゥディンの伝記には、大学カリキュラムの中に、宗教を必修科目として含めるよう、強く主張したことが書かれている。インドネシアでも、1960年代後半から、イスラームの授業が大学で教えられ始めており、イマドゥディンは、バンドゥン工科大学で電気工学と共に、イスラームを教える講師を務めていた。こうした経験のもとにイマドゥディンは、イスラームと近代科学は相反するものではなく、相互補完的であり、切っても切り離せないものであ

ることを、マレー人の若者たちにも理解させる必要があると考えたのである[Jimly 2002: 36]。こうしたイマドゥディンの考えは、ITKの校長に就任したアイヌディンの意見とも合致していた。宗教の必修科目化は政府のプログラムに含まれてはいないとか、イスラームを教えることで、ITKが時代遅れの大学になってしまうとか、学生たちを将来のイスラーム指導者に育てるつもりなのかなど、様々な非難や反対の声があり、議論になったが、結局、イマドゥディンとアイヌディンの主張は最終的に認められ、ITKは、マレーシアで最初にイスラーム教育を導入した大学になった[Yaacob 2011: 165-170]。

電気工学を修め、インドネシアの理系の最高学府であるバンドゥン工科大学で教職に就いたイマドゥディンにとって、科学とイスラームを結びつけることは一貫したテーマだった。回顧録の中で、彼はこう書いている。

タウヒードの概念の中で、私が常に強調してきたのは、現世と来世の学問、つまり科学とイスラームを統合することである。両者は、共に神に由来する学問であり、神の慣習(sunnatullah)に属するものである。前者は、不文の神の慣習であり、科学や技術が含まれる。後者はクルアーンとして文字化されており、信仰と敬虔さを生じさせる。イスラームと科学をつなぐ思考が必要とされている。これは私がしばしばモスクでの説教のテーマにするものである。[Imaduddin 2007: 321]

4.3. ダアワのトレーニングの実施

ITKで電気工学とともに宗教の授業を担当し、近代科学やテクノロジーとタウヒードの関係性について、学生たちに熱心に説いたイマドゥディンは⁹⁾、授業だけでは飽き足らず、大学の礼拝所を拠点に、学生たちを集めて定期的に説教会を開くようになった。

さらにイマドゥディンは、LDMIやサルマンの活動を通じ、彼が実践してきたダアワのトレーニングを、マレーシアでも学生を対象に実施した。このトレーニングは、1週間の短期集中トレーニングでLKD(Latihan Kader Dakwah:「ダアワの実践者養成トレーニング」の意)と呼ばれた。1回のLKDは、約40人の参加者を集め、寝食を共にしながら、学ぶスタイルである。日の入時(マグリブ)の礼拝と講義やグループワーク、夜の

8) [Jimly 2002] では、Datuk Hamzahとの表記[Jimly 2002: 35]。

9) イマドゥディンは、マレーシア国民大学でも、理系の教員が不足していた穴を埋めるために依頼され、理系の諸科目を教えた[Imaduddin 2007: 326]。

集団礼拝(qiamul lail)や早朝の講義、軽い運動などといったスケジュールを1週間こなす。イマドゥディンは、ITKでアイヌディンらによって、若い世代の信仰心を高め、活動的にするための機会を与えられた。LKDを通じて、全ての参加者はタウヒードの教えに触れ、ムスリム同士の同胞の意識を強めたのである。

アイヌディンの伝記には、LKDに参加した当時の学生の証言が掲載されている。それによれば、「LKDは、当時、他のイスラーム団体では行われたことのないようなトレーニングで、人生の進むべき方向を探す学生たちに対し、とても価値があるものだった。その目的は、心にクルアーンとハディースの教えをきちんと持つムスリムを生み出すこと、誰も恐れることのないイスラームの擁護者となるべく、若者を育てることだった。このトレーニングによって、ムスリムであることに誇りを持ち、社会主義や共産主義など、当時若者に人気のあったイデオロギーに染まることなく、学生時代を過ごすことができた」と述べられている [Yaacob 2011: 178]。

LKDは学生の間で次第に有名になり、ITK以外の学生を集めても行われるようになった。各地の大学や、様々な場所でのLKDの実施をコーディネートしたのがABIMの前身であるPKPIMであり、大学の休暇の時期を使って、多くの場所でLKDを企画し実施したのである [Yaacob 2011: 177]。LKDに参加し、イマドゥディンに指導を受けた学生の中には、その後、ABIMで活躍するメンバーも多く含まれていた。

4.4. イマドゥディンの帰国とその後

ITKで教鞭を取りながら、徐々に活動を広めていったイマドゥディンであるが、学生たちへの彼の影響力を警戒したマレーシア当局からの通告を受けた在マレーシアのインドネシア大使によって叱責されたことにより、イマドゥディンは契約満了の2年をまたぎ、マレーシア滞在21か月目にインドネシアに帰国した [野中 2017: 31-32]。

帰国後のイマドゥディンは、バンドゥン工科大学に戻り、再び教鞭を取りながら、完成したサルマン・モスクを拠点に、これまで以上に精力的にダアワの活動を展開していった。この時期に開始されたLMD (Latihan Mujahid Dakwah: 「ダアワのムジャーヒド(イスラームのために闘う人)養成トレーニング」の意) は、イマドゥディンの名を全国に知らしめることになったダアワの短期集中トレーニングであるが、このトレーニング

は、彼がマレーシアで実施したLKDと全く同じスタイルだった [野中 2008: 152]。LMDもまた、バンドゥン工科大学の学生だけでなく、全国の学生を集めて実施された。各大学からの参加者は、LMDで得た熱意とノウハウを、それぞれの地域に持ち帰り、各地域のモスクや大学キャンパスで、サルマンと同じようなダアワ活動を始める中心的役割を担っていった [野中 2008: 153]。

マレーシアでは、1975年、ITKがマレーシア工科大学 (Universiti Teknologi Malaysia: UTM) になり、理系の総合大学となった。マレー人学生の数を増やし、科目としてのイスラームの導入に尽力し、イマドゥディンを重用したITK時代の校長アイヌディンは、UTMの副学長として就任した。アイヌディン副学長のもと、マレー人学生の数も割合も急激に増加した¹⁰⁾。また、UTMでは継続して宗教の授業がマレー人ムスリム対して提供された。1987年時点でのUTMの状況を記した杉本の著作によれば、UTMではすべてのムスリム学生はイスラーム問題、倫理、法および社会を扱うイスラーム教育プログラムに参加することが義務付けられ、卒業の必修単位とされていることが述べられている [杉本 2005: 225]。また、イスラームの授業およびプログラムを、マレー人学生に対して必修科目及び選択科目として提供する動きが、他の国立大学でも次々と見られるようになった [杉本 2005: 250-251]。さらに、1970年代創設のマレーシア国民大学でイスラーム学部が設置されたのを皮切りに、1975年にはイスラーム教員養成カレッジで、また1980年にはマラヤ大学でイスラーム学部が設置され、1983年にはイスラーム学部を主要学部の一つとするマレーシア国際イスラーム大学が設立された [久志本 2015: 166]。マレーシアの高等教育機関のイスラーム化は、様々な側面で着実に進展しているように見える。

5. まとめ

本稿は、インドネシアの大学ダアワ運動の初期の拠点だったバンドゥン工科大学のサルマン・モスクに関する資料とマレーシア工科大学の副学長を務めたアイヌディンの伝記を用いて、1970年代初頭、インドネシアのバンドゥン工科大学からマレーシア工科大学の前身のITKに派遣されたイマドゥディンのマレー

10) 1978年の卒業生100人のうち、42人がマレー人、58人が非マレー人だった [Yaacob 2011: 217]。

シアでの活動を論じた。バンドゥン工科大学の講師であり、サルマン運動のリーダーだったイマドゥディンは、教員が不足していたITKに派遣され、自身が専門とする電気工学を教えながら、イスラームの科目化の必要性和有用性を訴えて実現にこぎつけ、また大学内外で学生たちに対し、ダアワのトレーニングを実践したことを明らかにした。

本稿で論じた1970年代初頭、マレーシアではマレー人優遇政策が開始され、高等教育機関では、マレー人学生の増加や授業でのマレー語の使用が至上命題とされた。一方、インドネシアでは、1950年代末のオランダ資本の接収と外国企業の国有化の影響を受け、バンドゥン工科大学など複数の国立大学ではそれまでのオランダ色は一気に薄れ、1960年代以降、インドネシア人教員によるインドネシア語による授業運営が主流となっていた。また1960年代半ば以降、宗教の授業も、大学レベルでも実施され始めていた。1970年代初頭、マレーシアの高等教育機関が直面していた課題は、それより少し前の時期にインドネシアが直面した課題であり、インドネシア人教員を受け入れ、活躍してもらうことで、マレーシアの大学改革にもインドネシアの経験が生かされていったのである。マレーシアの大学のイスラーム化は、国際イスラーム大学開設や、アンワル・イブラヒムが教育大臣を務めた1980年代を中心に論じられる傾向にあったが、本稿では、インドネシアの影響を受け、1970年代初頭にすでに、その萌芽が見られることも明らかになった。

本稿が扱った1970年代初頭という時期は、マレーシアではNEPによるマレーシア優遇政策が開始し、インドネシアではスハルト体制が確立していく時期であり、共に、その後1990年代半ばまで続く開発の時代の幕開けだったと言ってよい。その後、インドネシアのイマドゥディンはサルマン運動において中心的役割を演じながらも、当局に危険視され、1970年代末に逮捕されて11か月間拘留され、釈放後は博士号取得のために留学させるという名目でアメリカに追放された[野中 2008: 153]。イマドゥディンの意識や熱意は彼に育てられた学生たちによって引き継がれ、全国の大学でダアワ運動が拡大していった。一方で、マレーシアの大学は、マレー人学生の割合が年々増加し、1990年代には、全体の7割がマレー系学生で占められるようになった[杉本 2005: 193]。また、先に述べた通り、主要大学にイスラーム学部が設置されたり、国際イスラーム大学が創設されたり、さらに、各大学でイスラ

ムの授業も教えられるようになるなど、大学のイスラーム化は進展していった。ABIMのリーダーであり、イマドゥディンと直接の交流を持ったアンワルは[野中 2017]、マハティール首相の勧誘を受けて、1982年に与党UMNO(United Malays National Organization: 統一マレー人国民組織)に入党し、様々な「イスラーム促進政策」[鳥居 2004: 190]を実行して、政権内部からマレーシアのイスラーム化に貢献した。両国のムスリムエリートの間レベルの交流と協働は、開発が進む時代における両国のイスラーム化の萌芽を知る上で非常に重要な意味を持っているのである。

参考文献

- Bruinessen, Martin Van, 2002. "Genealogies of Islamic Radicalism in Post-Suharto Indonesia", *South East Asia Research*, Volume 10, Number 2: 117-154.
- Damanik, Ali Said, 2002. *Fenomena Partai Keadilan: Transformasi 20 Tahun Gerakan Tarbiyah di Indonesia*, Teraju.
- Furkon, Aay Muhammad, 2004. *Partai Keadilan Sejahtera: Ideologi dan Praksis Politik Kaum Muda Muslim Indonesia Kontemporer*, Teraju.
- Hefner, Robert, 2000. *Civil Islam: Muslims and democratization in Indonesia*, Princeton University Press.
- Imaduddin Abdulrahim, 2007. *Jejak Tauhid Bang 'Imad - Sebuah Otobiografi*. Kalam Salman ITB.
- Jimly Asshiddiqie, ed, 2002. *Bang 'Imad: Pemikiran dan Gerakan Dakwahnya*, Gema Insani Press.
- Liddle, William, 1996. "Media Dakwah Scripturalism; One Form of Islamic Political Thought and Action in New Order Indonesia", In *Leadership and Culture in Indonesian Politics*, Allen and Unwin: 266-289.
- Nagata, Judith, 1984. *The Reflowering of Malaysian Islam*, University of British Columbia Press.
- Yaacob, Fatini, 2011. *Ainuddin Pejuang 'Degil' Melayu*, UTM Press
- Zainah Anwar, 1987. *Islamic Revivalism in Malaysia*, Pelanduk Publications.
- 久志本裕子 2014 『変容するイスラームの学びの文化——マレーシア・ムスリム社会と近代学校教育』ナカニシヤ出版。
- 杉本均 2005 『マレーシアにおける国際教育関係——教育へのグローバル・インパクト』東信堂。
- 多和田裕司 2005 『マレー・イスラームの人類学』ナ

カニシヤ出版。

- 鳥居高 2004 「マレーシアの政治体制と二つの民衆運動」私市正年・栗田禎子編『イスラーム地域の民衆運動と民主化』179-196。
- 野中葉 2008 「インドネシアの学生ダアワ運動の原点：サルマン・モスクにおけるイスラーム運動の展開」『Keio SFC Journal』Vol. 8 No. 2: 147-160。
- 2010 「インドネシアの大学生によるタルビヤの展開：大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習」『東南アジア研究』48巻1号: 25-45。
- 2011 「インドネシアの大学ダアワ運動黎明期におけるマシュミの残映」『東南アジア 歴史と文化』40号: 100-125。
- 2012 『インドネシアの大学ダアワ運動再考——サルマン・モスクにおけるイスラーム運動の思想と現代的意義』SOIAS Research Paper Series No.7。
- 見市建 2004 『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』平凡社。